



Number 28

June, 2024

ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』日本語訳出版を振り返って

岡山大学名誉教授 福永 信哲

文学作品は読者を映し出す鏡

長年の懸案であった『ミドルマーチ』日本語訳上・下巻を2024年3月に完了し、上梓した今、おのれの本分を尽くした安堵の思いがある一方、誤字、脱字、不正確な文言などが早くも見付き、恥ずかしい思いを禁じ得ない。ジョージ・エリオット協会の企画の一部である以上、不十分な点が残ったことに対し、会員の皆様方にお詫び申し上げたい。

ジョージ・エリオット全集の出版という遠大な企画を立案され、監修の重責を担われた内田能嗣先生、海老根宏先生のご尽力に心より感謝申し上げたい。とりわけ、『ミドルマーチ』校閲の任に当たられた海老根先生には多大な時間をかけて拙訳原稿の問題点を指摘していただいた。誤訳の訂正、文体の不適切さ、原文への忠実さの欠如、注の説明の不十分さなど、丹念に吟味していただき、精細なご助言を賜った。これは、私には得がたい学びの機会となった。この機会を借りて、衷心よりお礼を申し上げたい。

翻訳作業はいつ終わるとも知れない、辛抱の要る営みであったが、不思議にも仕事に倦んで、投げ出したくなることはついぞなかった。翻訳は究極の精読と言われるように、作家の言説との絶えざる対話だということを、改めて認識した。そのプロセスで、それまで気づかなかった問題点や隠れた意味あいを発見した喜びは小さいものではなかった。作品に鏡のイメージが頻出するが、翻訳とは読者が自分の姿を作品という超高感度の鏡に映し出されるプロセスではないかと、振り返って気づかれた。それほどに、すぐれた作品には、読者の器に応じてその姿を現す真価があることが実感された。その観点から見ると、拙訳は私の小さな器に映し出された大作家の歪んだ像のようなものかも知れない。

ジョージ・エリオットの円熟期の文体は「多音声」を宿していると言われる。語り手が時に登場人物の心境に溶け込み、当人の心の思いを語り、時に洞察力ある語り手が偏見や利害に囚われた当事者の自負を皮肉ってみせる。絶えず視点を移動して、人物が関係し合い、相互に影響し合い、時に傷つけ合い、時に愛し合い成長してゆき、あるいは因果応報の道理によって罰せられるさまを、語り手は俯瞰的に見せてくれる。こうして読者は、多様な人物の織りなす人生模様をつぶさに眺め、おのれと人生の多様な価値を相対化し、おのれの価値を作品地図の中に位置づけるよう仕向けられる。

「訳者あとがき」の中で、筆者はこう述べた。「現代社会で重視される効率主義と生産性の価値尺度は、文学の古典講読には馴染まない。ただひたすら心を無にして読むことによってのみ、作品の囁く声が聞こえてくるように感じられた」と。言い換えると、無心にテキストの文脈に聞き耳を立て、その囁き声に聞き入る他には参入できない世界がそこにある、と思われた。では、こう思わせるジョージ・エリオットのテキストにはどんな特徴があるだろうか？その実例を一つの場面を例に取って、具体的に取り上げてみたい（以下、「解説—その二」、『ミドルマーチ』下巻 525-26 頁参照）。

人と人の触れ合いこそプロットの推進力

『ミドルマーチ』には人と人の個性が触れ合って、言わば化学反応を起こす場面が少なくない。これにより、人物は新たな体験をして変わるだけではなく、物語自身が新しい展開をしてゆくのだ。命の相互依存は、個々の登場人物の間にあるだけではなく、人物同士のネットワークと、一つの全体としての作品の形式にも見られる。30章でドロシアが夫カソーボンの健康の衰えを心配し、掛かりつけ医のリドゲイトに相談する場面がある。夫との緊迫したいさかい(29章)の結果、彼は心臓発作を起こしたのである。その折の二人の触れ合いは、それぞれの人生の転機ともなった。「どうかお助けくださいませんか？」すすり泣くような声で夫の身を案じるドロシアは、リドゲイトにこう吐露した。

「ああ、あなたは知恵の深い人なのでしょ？生きること、死ぬことについて知り抜いておられるのでしょうね。お教えてくださいまし、わたくしに何ができるか、お考えくださいまし。夫は生涯心血を注いで研究をしてきました。それが完成することを心待ちにしてきたのです、他のことは心になかったのです——そして、わたしもそのことのみ考えて——」

その後いく年もいく年も、リドゲイトはこの思わず口を衝いて出てきた訴えが彼の心に残した感銘を忘れることはなかった。それは魂から魂へと訴える叫びであった。二つの似通った天性が、同じ因縁の糸で絡み合った環境の中、悩みが多いながら時折光に照らされる人生で相響き合うのみで、それ以外のいかなるはからいも混じらない叫びが心に焼き付けられたのである。(上巻 367 頁)

“Oh, you are a wise man, are you not? You know all about life and death. Advise me. Think what I can do. He has been laboring all his life and looking forward. He minds about nothing else— And I mind about nothing else—”

For years after Lydgate remembered the impression produced in him by this involuntary appeal—this cry from soul to soul, without other consciousness than their moving with kindred natures in the same embroiled medium, the same troublous fitfully illuminated life. But what could he say now except that he should see Mr. Casaubon again to-morrow?

(Oxford World Classics. 2008, p. 272.)

試練のただ中で人格の奥底からほとぼしり出る心の叫びというものがある。迷い苦しむおのれをさながらに投げ出し、自己の外にある大きな働きに身を任せる他にない瞬間がある。そういう淵で発せられた言葉には、当人が表現しようとして意図する以上の人間性が溢れ出るものだ。夫の人間性のありようがどうであれ、悩み苦しむ伴侶に憐れみを禁じ得ないドロシアの姿は、紛れもない個性のほとぼしりなのだ。人と人の個性が真に出会うのは、そういう稀な瞬間なのだ。この場面でリドゲイトは、自分を忘れて夫の苦衷をいたわる貴婦人の人間性を見た思いがしたのである。こういう人間性の発露は、これに触れた相手の心の機微に働きかけ、一つの体験として生き続けるのだ。「同じように悩みが多いながら時折光に照らされる人生で」(the same troublous fitfully illuminated life)、相談する側も支える側もともに、闇を手探りする中で導きの光に照らし出される体験をしたことが、この言い回しに暗示されている。同時に、一人の人格の統合性とは、当人と同胞との関わりあいにあるという道理が示唆されている。だからこそ、人は他者との真正の関わり合いと、その導きなしには生きられないのである。

上記引用の「同じように悩みが多いながら時折光に照らされる人生で」では、試練のただ中であって悩み苦しむ我々の心にふと気づきが訪れたり、同じような体験をした人の漏らした一言が明かりのように心に射し込んだりすることがある。エリオットはこういう稀有の瞬間を凝縮した語句で、絵画のように描く詩的直観を持っている。訳しながら心打たれ、自分は作家に導かれている、と感じたことが忘れられない。

■報告 2

『フロス河畔の水車場』における子ども性

山口大学教授 池園 宏

『フロス河畔の水車場』の子ども表象については先行研究があるが、本発表ではそれらに加えて子ども研究関連諸分野の知見にも目配りしながら、テキストに内包されたマギーの子ども性を巡る問題を掘り下げることにより作品の再考を行った。

最初に試みたのは、近代における子ども観の変遷の歴史と本作品との関連性に関する考察である。ロマン主義思想とピューリタニズム思想に見られる対照的な子ども観、両者に共通する教育思想、さらにはその延長線上にある児童文学の趨勢など、多角的な視点から子どもを巡る歴史的現象とマギーの特性とのつながりを検証した。

上記の内容を土台にしつつ、発表の後半では、ビルドゥングスロマンでもある本作品で提示される思春期以降のマギーに焦点をシフトして、さらに議論を発展させた。成長するマギーの根底に存続し、成長後も留まり続ける子ども性が、人生の方向性を決定づける重要な諸局面——トマス・ア・ケンプスの書との遭遇、スティーヴン・ゲスト事件、最後の洪水シーン——において前景化し、持続的干渉を及ぼし、彼女の悲劇に結びついている事実を論証することにより、本作品に関する新たな解釈を提示した。

■報告 3

翻訳の領域

和洋女子大学名誉教授 植松 みどり

The Mill on the Floss の翻訳にあたり「翻訳の領域」もしくは翻訳者の領域についての苦悩の経験を語った。創作者と読み手と翻訳者の立ち位置をどのように考えたらいいのか。翻訳するものはどこまで自由に作品に対処できるのか。

「翻訳者」とは優れた「読み手」「批評家」であるべきだと大江健三郎は述べ、さらに優れた「書き手」であれと、「新しきひとよ 目覚めよ」で提示している。

では、翻訳者はどの程度、原作からの変化、逸脱を許されるのか。特に地域も年代もかけ離れ、文化の異なる異国のものの翻訳のときに、『フロス河畔の水車場』翻訳にあたり、自由に、勇敢に、厚かましくも決断した個所を具体的に取り上げ登場人物の社会的な、特に家族的な位置についての考察と、この作品に現れた差別用語に対する、当時の作者の意識と現代の受け取り方の差異などについて考え決断した箇所を述べ、その是非を聞き手に問いかけた。

最終的には、作品の短所ともされているスティーヴンの存在と悲劇的な結末、「洪水」の意味を現代の視点から読みとり、*The Mill on the Floss* で G.エリオットが、過去、現在、未来をつなぐ小説家であるという、翻訳者からの評価を示した。

■報告 4

『フロス河畔の水車場』の異なるあり方について

京都女子大学教授 鴨川 啓信

『フロス河畔の水車場』の映画アダプテーション作品を取り上げて、この物語の再読を試みた。長編小説の物語は、時間的制約がある映画で語り直されるとき、必然的に「圧縮」される。そして「圧縮」は、ただエピソードや描写を省略するだけでなく、物語全体の質的な変化を生じさせることがあると指摘するアダプテーション研究を参照し、『フロス河畔の水車場』の場合について考察した。

第三者的視点から場面全体を映し出し出来事を明示する映画の語りは、登場人物の性質や内面についての詳細な記述を積み重ね、その背後で進行している出来事の全体像を読者に推測させる小説の語りに比べ、コンパクトで分かりやすいものになっている。一方、この小説の映画アダプテーションの中には、小説には描かれていないことを独自に追加して物語の性格付けを行うものもある。アダプテーションの圧縮が物語の性質を大きく変えるものであれば、情報を削除するだけでなく、追加によるメディア変換もありえることを論じた。

なお、インターネットをご利用なさらない会員の方々には、郵便で各種資料の送付をしておりますが、こちらでも変更が生じましたら、事務局までご連絡ください。

事務局：〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1 徳島文理大学香川校 中島正太研究室内
日本ジョージ・エリオット協会事務局

協会設立 20 周年記念事業に関するご協力のお願い（再掲）

本協会では設立 20 周年記念事業の一環として、テキスト・シリーズ「ジョージ・エリオットを原文で学ぼう」プログラムの発刊計画を進めています。

大阪教育図書のご協力のもと、第一巻、『サイラス・マーナー』教科書が、2017 年 12 月に刊行されました。会員の皆様におかれましては、今後も、大学や大学院その他の場で、是非、『サイラス・マーナー』教科書を採用していただきますよう、ご協力の程、よろしくお願いいたします。

尚、協会では引き続き、第二巻『フロス河畔の水車場』教科書の発刊計画に向けて準備を進めています。

第 27 回全国大会について

2024 年 12 月 21 日（土）、成蹊大学（東京都武蔵野市吉祥寺北町 3 丁目 3-1）にて、第 27 回全国大会を開催いたします。当日は、研究発表、総会、シンポジウム、特別講演会、懇親会を予定しております。多数の皆様のご参加をお待ちいたしております。

大会の詳細は 10 月に協会のホームページに掲載し、ご登録いただいているメールアドレスへお送りする大会プログラムでもお知らせいたします。経費節約のため、大会プログラムはホームページまたは添付ファイルよりダウンロードしていただきますようお願いいたします。また、大会のご出欠はメールでご案内しますオンライン出欠フォームをご利用いただきますよう、お願いいたします。

なお、昨年度の総会におきまして、会員の方々（学生会員を除く）にも大会参加費をお一人 500 円いただくことが決定されました。協会の運営費確保のため、ご協力の程、お願いいたします。

第 27 回全国大会シンポジウム 題目：19 世紀イギリス小説と医学・科学（仮）

- 講師 佐藤エリ（神戸女学院大学非常勤講師）
他者の心を科学できるのか—『ミドルマーチ』における「二組の夫婦の問題」
- 司会・講師 矢野奈々（北里大学専任講師）
医者・科学者であるリドゲイトとジキル博士の心の均衡について
- 講師 谷田恵司（東京家政大学名誉教授）
『荒涼館』の突発的人体発火をめぐるルイスとディケンズのやりとりから考える、
文学と科学の接点

シンポジウム要旨

19 世紀のイギリスは医学と科学が急速に進歩し、それと共に小説における医者・科学者の描写も変化した。フェリシア・ボナパルトはオックスフォード大学出版局版『ミドルマーチ』の序文で「エリオットはリドゲイトのような科学者を登場させるだけではなく、科学的思考を小説に導入した最初の人物」であることを言及している。このようなエリオットの小説家としての科学的アプローチの背景には、彼女のパートナーであったルイスが医学や生理学研究に没頭していたことが大きく影響する。またルイスは当時の著名な文芸家との交友があり、彼らにも科学的な面での影響をもたらしてもいる。

本シンポジウムでは、医学、科学的テーマが含まれたエリオットの作品と、19世紀イギリス小説、さらにはルイスの著書を取り上げ、当時の文学と医学・科学について考察していきたい。

佐藤氏はルイスの著作『生命と精神の諸問題』（全5巻シリーズ）から特に『心理学の研究』における議論を用いて、『ミドルマーチ』の2組の夫婦——ドロシアとカソーボンおよびリドゲイトとロザモンド——の関係性について論じる。個々の主観的な精神は、どこまで他者を理解しえるのか、についてエリオットとルイスの考えを明らかにしていく。矢野はマッドサイエンティストのステレオタイプとも言われる『ジキル博士とハイド氏』のジキル博士と『ミドルマーチ』のリドゲイトのそれぞれの心の均衡に焦点を当て、対極する二つの心の出現と医者・科学者との関係性を考察する。最後に谷田氏はチャールズ・ディケンズの『荒涼館』第32章での突発的人体発火による登場人物の死亡をめぐるルイスの批判とディケンズの反論などを手がかりにして、エリオットの作品も踏まえつつ、文学と科学の接点を考えていく。（矢野奈々）

第27回全国大会特別講演のご案内

本年度の特別講演には、大石和欣先生（東京大学総合文化研究科教授）を講師としてお招きします。先生のご専門はロマン主義を中心とした、18世紀から19世紀におけるイギリスの文学の社会史的研究で、著書に『家のイングランド—変貌する社会と建築物の詩学』（名古屋大学出版会、2019年）、編著に『コウルリッジのロマン主義—その詩学・哲学・宗教・科学』（東京大学出版会、2020年）、*Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations* (Bloomsbury, 2013)などがあります。ロマン主義研究と並行して、18世紀末から19世紀半ばにかけての「共感」の歴史的・思想的な布置を明らかにしながら、その位相を女性小説家たちの作品のなかに辿るご研究も行い、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』やエリザベス・ギヤスケルの『北と南』に関する論文を発表されています。今回の特別講演のタイトルは「共感と慈善の限界——ジョージ・エリオット小説における女性の生と社会のしがらみ」です。皆様、奮ってご参加ください。

講演要旨

ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』（1871-72年）において、カソーボンは博愛の精神に基づく社会活動であるフィランソロピーを「広大な領域」と呼ぶが、それは直接的には福音主義者として奴隷貿易廃止運動に尽力したウィリアム・ウィルバーフォースの活動を指してのことであり、後にドロシアが活発に行う篤志がそこに含まれるほど「広大な」ものかどうかについては議論の余地がある。

実際、エリオットの小説では、豊かな共感力を備え、ときに慈善活動や篤志を志す女性が登場するが、彼女たちはさまざまなしがらみに絡みとられてしまい、必ずしも十分な社会貢献を果たしているわけではない。ドロシアは最終的にウィル・ラディスローとの再婚を選ぶことで、資産を失い、志半ばにして慈善事業を放棄せざるをえないし、『アダム・ビード』（1859年）のダイナ・モリスは最終的にはアダムと結婚することで、メソヂスト説教師としての活動から身を引いてしまう。その一方で、『ロモラ』（1863年）の主人公は、夫との結婚生活の失意と破綻がきっかけとなり、サヴォナローラとの邂逅を経てフィレンツェの社会的弱者に対する共感を胸に献身的な慈善活動への道を進むことになるが、サヴォナローラの狭量な狂信性や血縁や地縁が求める責務がそうした共感や慈善の障害にもなり、ときにマイナスに作用しさえすることを明瞭に意識していた。

19世紀のイギリスにおいて慈善活動は、女性たちにいわゆる公共圏に関与する口実や突破口を提供したが、その感情的基盤ともいべき共感とは、夫婦や家族に対する愛情や義務感、あるいは資産や地位といった経済的・社会的条件と不可分であったことも事実であり、エリオットはそうした共感や慈善を規定する社会のしがらみとその構造を描いている。本論ではその位相を、感情史の手法を一部用いて、シャーロット・ブロンテやエリザベス・ギヤスケルの小説における「共感」のあり方と比較しながら浮かび上がらせてみたい。

第 27 回全国大会研究発表者の募集

発表テーマ： ジョージ・エリオットに関連したもの 発表者数： 1～2 人（予定）
応募資格： 日本ジョージ・エリオット協会会員 応募締切： 7 月 25 日
発表時間： 30 分（発表 25 分、質疑応答 5 分）時間厳守でお願いいたします。
レジュメ： ワープロ A4 版で、約 400 字程度。発表題目には、英文名も添えてください。
※ 原稿には、氏名・住所・所属・電話番号・メールアドレスを明記してください。

宛先： 〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1 徳島文理大学香川校 中島正太研究室内
日本ジョージ・エリオット協会事務局／E-mail: georgeeliot.japan@gmail.com

応募は郵送、またはメールで、お申し込みください。応募者多数の場合は、調整させていただきます。

※ 本協会は、学生会員の研究活動を支援し、研究発表を奨励しております。学生会員が発表を希望する場合は、発表のレジュメに指導教員の推薦文（書式自由）を添え、7 月 25 日までにメールにて事務局にお送りください。

2025 年度『ジョージ・エリオット研究』第 27 号への投稿論文募集

2025 年 11 月に発行予定の学会誌『ジョージ・エリオット研究』第 27 号の投稿論文の締め切りは 2025 年 4 月 1 日（火）厳守です。奮ってご応募ください。投稿規定およびチェックシートは、協会のホームページ (<https://www.g-eliot.com/ronshu>) からダウンロードすることができますので、必ずご参照ください。論文の他にも書評を募っておりますので、新刊書などの書評をご希望される方は、編集委員長の新野緑先生、もしくは事務局まで、お早めにお申し出ください。

会費納入のお願い

会費納入につきまして、お願いいたします。年会費および振込先は、以下の通りです。

一般会員	7,000 円（国内会費 5,000 円と英国本部会費 2,000 円）
英国本部に登録された終身会員	5,000 円（国内会費のみ）
学生会員（大学院生、学部生など）	2,000 円（本部会費を含む）

振込先（郵便振替口座）：00960-0-105579 日本ジョージ・エリオット協会

*手数料はご負担いただいております。

なお、事務処理の都合上、9 月末までにお振込をいただきますよう、ご協力をお願いいたします。ご承知の通り、本協会は英国ジョージ・エリオット・フェローシップの支部をかねており、毎年 1 月に英国本部に会費を送金しております。会費納入が年を越しますと、本部への送金に間に合わず、本部からの郵送物が受け取れなくなります。また、退会につきましてもお申し出がない限りは、遡って未納分の会費を納入していただくこととなっておりますので、くれぐれもご注意ください。

新入会員の確保について

現在、本協会は、一般会員 65 名、終身会員 12 名、学生会員 4 名、合計 81 名となっております。年々数名の会員が加入される一方で、退会される会員もおられ、全体として会員数は漸減傾向にあります。100 名を切る状態が続きますと、日本学術会議から協力学術研究団体としての認定を受けられなくなる可能性がありますので、会員の皆様におかれましては、新入会員確保にご協力を賜りますようお願いいたします。この問題に関するご意見等がございましたら、事務局までお知らせください。

George Eliot Newsletter of Japan 第 28 号

発行者 日本ジョージ・エリオット協会

代 表 廣野 由美子

編 集 濱 奈々恵

事務局 徳島文理大学香川校 中島正太研究室内

〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1

TEL 087-899-7152 (直通)

E-mail georgeeliot.japan@gmail.com

Homepage <https://www.g-eliot.com/>

振替口座番号 00960-0-105579

発行日 2024 年 6 月 1 日